

引っ越しの二人きり、後輩の彼女がほどける

ギャル系の後輩が、初冬の引っ越しで距離を縮める——互いを選ぶ決意と、結ばれた後の幸福感

夜更け文庫／夜野しずく

本作品はフィクションです。登場人物はすべて18歳以上の成人であり、実在の人物・団体とは一切関係ありません。

プロローグ

真琴は、静寂に満ちた部屋の中でただ息遣いを一つ深く吐くことだけで、空気を揺らし続けるような存在だった。彼が搬入したばかりの新しい家にはまだ生気の欠如があり、そこにこの女性が現れた瞬間、まるで古びた絨毯の上に暖炉の灰を撒いたような、温もりと微塵の乱雑さが漂ってきた。二人の関係性はかつての主従として定着しており、颯太という男が彼女をどのように捉え続けてきたかは、数日間の残業続きの日々を介して刻み込まれていた。しかし今は違う、彼らの世界観が歪み始める時だ。休日の午後に広がる余白のような時間において、彼女はいつもより一歩だけ前かがみになり、袖口から漏れる香水の甘さが彼の視界を霞ませているのがわかった。

いつもの彼女は、事務所の冷たい空気や厳格な視線に慣れ切っていたため、自由な時間に身を任せることに戸惑う様子があった。だが今朝、颯太の手によって丁寧に整えられた髪型からは、彼女自身がどこか愛撫されたように満たされている感覚が滲み出た。颯太はソファの奥深くで腰を下ろし、真琴が差し出したコップを受け取る仕草に目を細めた。その指先がガラスに触れた時の涼しさ、そして彼女

の体温が伝わる手首への圧力――五感は常に二人の間を行き来しており、言葉だけで説明しようとする努力は徒労に思えた。彼女は彼を「主人」と呼ぶことは日常茶飯事だったが、この瞬間だけは呼びかけを控え、囁くような声で名前だけを呟いて顔を伏せた。

部屋の中にはまだ荷物の箱が数個残されており、引っ越しという些細な出来事が二人の距離感をいかに曖昧にしたかを物語っていた。初冬の光が窓から斜めに差し込み、床に落ちる影がゆっくりと伸びていく様子は、時間が止まったかのような錯覚を生んでいた。真琴はその光の中で、颯太の視線が彼女の襟元や鎖骨へと留まっていることに気づいて慌てたのか、無意識に肩をすくめて防御態勢に入った。それでも颯太の手のひらはあえて優しく彼女の背中に食い込み、彼女が縮こまるたびにさらに強く押し付けるように振る舞った。それは単なる接触ではなく、互いの領域が重なろうとする時に見せる、生々しい緊張感だった。

「また、震えている」

彼は静かな響きで声を絞り出し、その一言が空間を歪ませた。真琴は驚いたように頭を上げ、唇を噛みしめる仕草をした。普段ならすぐに返事を返し、彼の意図を読み解こうとするのが彼女だが、今の彼女はただ受け身になりきっているだけだ。中腰になった姿勢が彼女の股間に余分な重

さを加え、布地との摩擦だけが悶えを伝えてくる。まるで主従逆転したかのようでありながら、依然として彼らの関係性は古風な秩序を守りつつあるような錯覚を与えた。

真琴は頷き、その動きに合わせて髪が額にかかるのを気にする余裕も持てなかった。彼女は颯太の匂いに溺れ込んでおり、彼独特の古書の香りか汗のような湿気が混じった息遣いが、彼女の肌の上を撫で回すようだ。この空間には言葉を超えた密度が存在しており、二人が呼吸を合わせているだけで、周囲の物音が遠ざかるまで続いていた。最も濃い夜の只中へ向かうための序章に他ならず、これから始まる行為そのものよりも、それまでに蓄積された予感の方が圧倒的に強かった。彼女はもう逃げ場を失い、颯太という存在が占領してくるのを待つばかりだった。

「……まだ、終わらないのか」

そう呟いて彼女が再び視線を落とし、颯太の胸元へと顔を埋めるように身を乗り出した瞬間、部屋全体が熱く揺蕩うのが見えた。



——ここから先は製品版でお楽しみください——